



勘違いの工房主

Kanchigai no
ATELIER MEISTER

英雄パーティの元雑用係が、
実は戦闘以外がSSSランクだった
というよくある話

アトリエマイスター

7

時野洋輔

Tokino Yousuke

ILLUSTRATION

ゾウノセ

登場人物紹介

エレナ

クルトたちハスト村の人々に造られたゴーレム。ゴルノヴァと行動を共にしていたが――

ゴルノヴァ

クルトのかつての仲間。故郷である剣聖の里へ、クルトを追って戻ってくる。

ヒルデガルド

クルトの幼馴染。こう見えて1200年生きており、「老帝」の二つ名を持つ魔王。

ウラノ

1200年前のハスト村でユーリシアやリーゼロッテに手を貸してくれる少年。

リーゼロッテ・ホームーロス

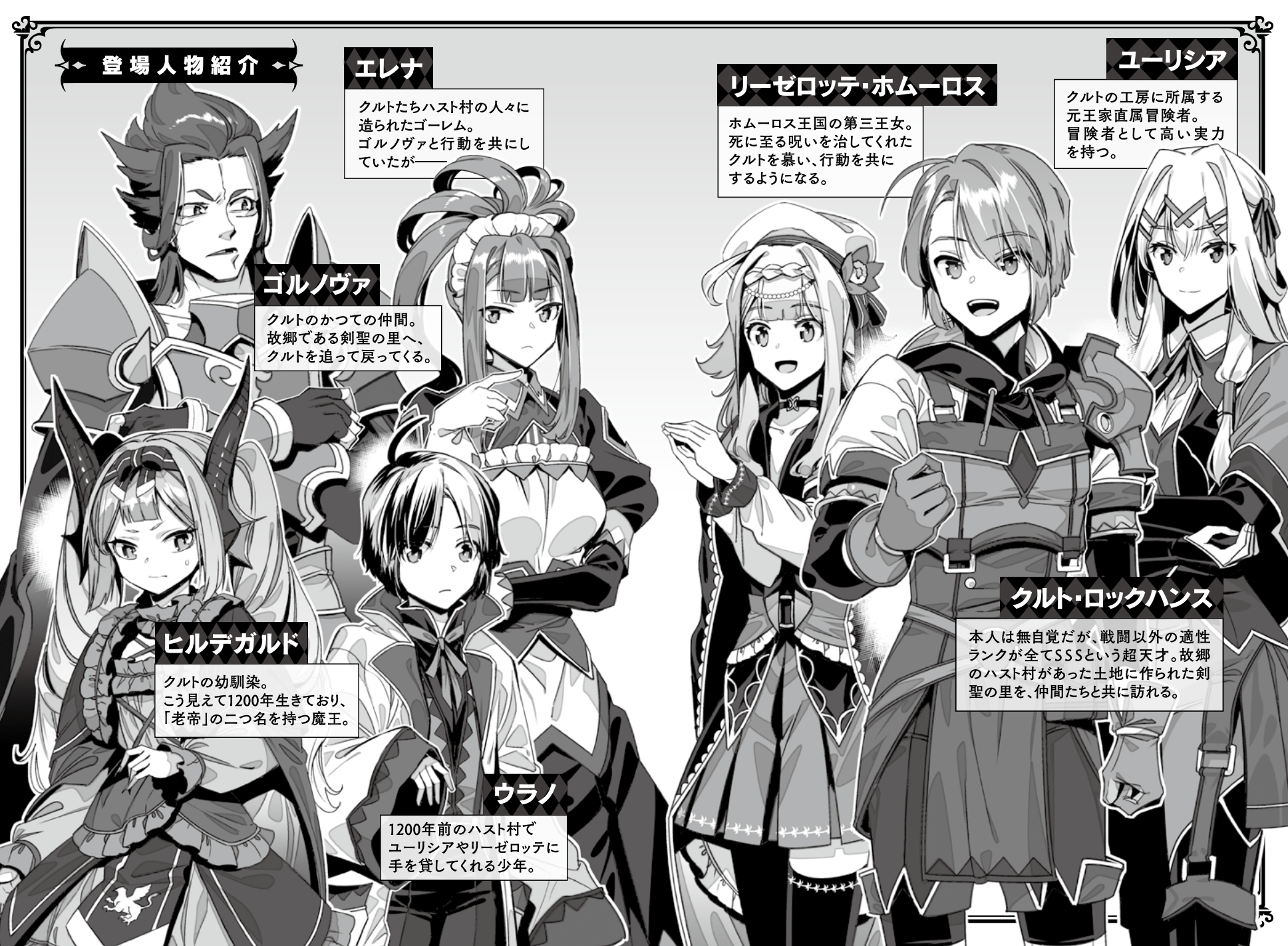
ホームーロス王国の第三王女。死に至る呪いを治してくれたクルトを慕い、行動を共にするようになる。

ユーリシア

クルトの工房に所属する元王家直属冒険者。冒険者として高い実力を持つ。

クルト・ロックハンス

本人は無自覚だが、戦闘以外の適性ランクが全てSSSという超天才。故郷のハスト村があった土地に作られた剣聖の里を、仲間たちと共に訪れる。



プロローグ

それは見る者が見れば、異様な光景でしょう。

私の視線の先では、ゴブリンを始め、多種多様な魔物たちが列をなしてひたすらに進んでいます。本来、ゴブリンやオークのような低級な魔物は、自分より下の種族の魔物を武力で制圧して手駒として使うことはあっても、対等な立場で協力して行動をとめることはないのですから。

ましてや、そこにスケルトンやゾンビのような不死生物が混ざることなどありません。

しかし、それを為すことができるのが、私——《演出家》^{ディレクター}なのです。

私の仲間だった《脚本家》^{スクリンター}には、人間や魔族を甘い言葉で思うように動かす力がありました。しかし私には、そんな回りくどいことをせずとも、下級の魔物ならば何十万、何百万と操る力があります。

私たちの主たる魔神王様にとって、どちらが有用かは言うまでもありません。それが証拠に、私は魔神王様から、この戦いにあたり、ある魔道具を賜りました。

もともと、私の演出プランではこの魔道具の出番はありませんが……しかしながら、それだけ私が魔神王様に愛されているということでしょう。

私が首無し^{ヴァンパイア}の馬が引く馬車に乗って移動していると、配下の魔族、吸血鬼の一人が接近してきた。

「《演出家^{ディレクター}》様。報告がございます」

「なんですか？」

「草からの報告によりますと、ラブセラドに老帝^{オールド}配下の魔族七千が集結。守備を任されているのは、側近のソルフレアとのことです」

ラブセラドは老帝——ヒルデガルドの領地にとって守備の要。

絶対に落としてはいけない要所。

「なるほど、鬼のソルフレアを投入してきましたか。老帝自ら兵を率いると思っておりましたが」
となると、老帝はさらに奥に？ ……いいえ、彼女の性格からしてそれはないでしょう。

とすると、我々の向かう剣聖の里に？

「ふふ、なるほど。そうですか。あくまで剣聖の里を重要視するというわけですか」

これは好都合というものです。

老帝の首、この私の手で取ってみせましょう。

最大の演出を以て！

この戦いは魔神王様に全幅の信頼を置かれた私のための軍物語^{いさな}です。

第1話 開戦準備と過去のハスト村

僕——クルト・ロックハンスは、幼馴染^{おともな}である魔族のヒルデガルドちゃんと一緒に剣聖の里を歩いていた。

時間移動のために疲れて寝てしまった娘のアクリは、ドライアドのニーチェさんに預けている。

僕は、かつてこの場所で生まれ、そして育った。

記憶の中のハスト村と照らし合わせてみたら、確かに共通する景色も残っているけど、僕が育った家を含め、多くの建物はもうどこにも見当たらない。

僕の記憶の中ではこの場所で過ごしていたのは十数年前の出来事なのだけれども……実際には千二百年前の出来事だったらしいから仕方がないか。

「クルト、どう？ 少しは懐かしい？」

「うーん、懐かしいというより不思議な感じかな。本当に千二百年経っているんだって、まざまざと実感させられるから」

「実際に生きてみたらもつと実感できるわよ」

ヒルデガルドちゃんは皮肉を込めて笑ったので、僕は素直に「ごめんなさい」と謝った。

そう、千二百年の時間が流れていることを裏付けるのは、変わってしまった風景だけではなかった。

彼女——僕にとっては十数年前に村で出会い、そしてつい最近再会したばかりのヒルデガルドちゃんは、実はもう千二百歳を超えている。

僕と一緒に村にいた頃、彼女は僕のミスで大怪我を負った。

その時に近くに生えていた草花を使って僕が作った回復薬で、彼女は一命をとりとめたんだけれども、調合を誤っていたせいで、彼女を不老の体にしてしまったんだ。

簡単な回復薬っていうのは、人が自然に傷を治そうとする力を高める薬だ。

しかしその効果が強すぎると、傷を治すどころか、細胞を現在の最適な状態に維持しようとし、それ以外の肉体の動きを抑制することになる。

たとえば『老い』という、人なら誰しも受け入れているものでさえも。

まあ、こんな不老の力が入った薬、普通なら間違えても作ったりしないんだけど、やっぱり僕も子供の頃はそういう基礎的な部分ができていなかったんだね。

「そういえば、ヒルデガルドちゃんが不老だって知ってから、聞いたかったことがあるんだけど」

僕は歩きながら、ヒルデガルドちゃんに尋ねた。

「なにかしら？」

「どうして、ヒルデガルドちゃんはずっと不老のままいたの？」

「……どういう意味？」

ヒルデガルドちゃんが立ち止まり、僕を睨みつける。

「あ、ごめん。怒らないで。でも、不老を元に戻す薬を作るのには、確かに珍しい花が必要になるけれど、僕でも作れる薬なんだし、千二百年もあつたら手に入る機会もあつたんじゃないの？」

たぶん、僕が薬の材料を探したら、一カ月くらいで見つかると思う。

僕がそう尋ねると、ヒルデガルドちゃんは顔を伏せて、小さな声で何かを言った。

「(そんなの簡単に見つかるわけじゃないでしょ、バカクルト。それどころか、こっちは幼い頃から、不老の力を求めるバカ共に狙われて大変だったんだから)」

「え？ なに？」

よく聞こえなかったので聞き返すと、ヒルデガルドちゃんは顔を上げてキッと見てくる。

「そんなの、いつかクルトを見つけて文句を言っただけのために決まってるでしょ！」

「うわ、ごめんなさい」

「もういいわよ、怒ってないからこれ以上蒸し返さないで」

「怒ってるよね？」

「怒ってないっ！」

ヒルデガルドちゃんは僕にそう怒鳴りつけた。

怒られちゃったけど、千二百年経ってもヒルデガルドちゃんはヒルデガルドちゃんで、少し安心

した。

変わらないのはヒルデガルドちゃんだけじゃない。

裏庭にあった大きな岩とか遠くに見える山の稜線とか、見覚えがあるものもあり、やっぱり僕を安心させてくれる。

でも、なぜ僕は、千二百年も未来にいるのか？

そして僕以外のハスト村の人たちはいったどこに行ってしまったのか？

大賢者とは何者なのか？

そして、人工精霊でもある時の大精霊——アクリはどうして生まれたのか？

そのことを調べるため、僕達はヒルデガルドちゃんが作った魔法陣とアクリの力を使い、千二百年前のハスト村に精神を送り、調査をする予定だった。

ただなぜか僕とヒルデガルドちゃんは過去に行くことができず、一方で工房の仲間のユーリシアさんとリーゼさんは、精神どころか、肉体ごと過去に飛んでしまった。

二人は無事に帰って来られるのだろうか？

そもそも、本当に過去のハスト村に時間移動できたのだろうか？

不安は尽きない。

だけど、ここで悩んでいるわけにもいかない事情があった。

この剣聖の里に、ヒルデガルドちゃんと敵対している魔族——魔神王の軍勢が迫っているのだ。

想定では、三週間後にはこの里に到着する。

しかも、この里が魔神王の軍勢に落ちれば、里の中にある転移石を使って、僕達が住んでいるホムーロス王国にまで攻めてくるかもしれないという。

第三席宮廷魔術師であるミミコさんが、即座にタイコン辺境伯に連絡してくれたお陰で、援軍もこの里に到着している。

それでも、敵の数は三十万というから、こちらの旗色が悪いのは明白だ。

本当に大丈夫だろうか？

やはり不安が拭えず、悩みながら歩いていると——

「クルト、危ないわよ」

「え？」

ヒルデガルドちゃんの言葉が耳に届くと同時に、僕は何かにつかった。

でも、目の前には何もない。

あ……そうか、すっかり失念していた。

「そういえば、こつて城壁が透明だったんだ」

この里はグルリと城壁に囲われているんだけど、その城壁は視認することができない。光を屈折させず、完全に透化させる建材を使い、見えない城壁にしているのだ。

表面も滑らかで埃などが溜まることもないから、注意しないとこうしてぶつかってしまう。

ただ、雨の日だけは城壁を伝って流れる水が綺麗^{きれい}だった。

「自分の村なのに忘れてたの？」

「うん、子供の頃のことだし」

僕は鼻を押さえて言った。

「大丈夫？ 鼻血出てるじゃない。ハンカチがあるから使いなさい」

「平気だよ。自分があるから」

僕はそう言って、薬を飲んで出血を止め、ハンカチで鼻を拭いた。

「お二人は本当に仲がいいですね」

そんな僕たちを見て、近くにいたこの里の人たちが近寄ってきた。

なんでも、彼らのご先祖様はハスト村の住民に恩があるそうだ。

そのご先祖様というのは、ハスト村がかつてこの土地にあった頃に、近くで武者修業をしていたアーサーさんという冒険者らしい。よく村に訪れては、ゴブリンの襲撃を撃退してくれる、尊敬できるお兄さんだった。

アーサーさんとは仲良くさせてもらっていたから、それを恩だと感じていたのかな？

その恩を千二百年経った今でも子孫の人たちは忘れておらず、ハスト村の一員である僕も大切な客人として迎え入れてくれたのだ。

「それにしても驚きました。あのアーサーさんがグルマク帝国の初代皇帝様で、皆さまのご先祖様

だなんて」

「私も、始祖様と実際にお会いした話を聞いて驚きです」

僕の言葉に、里の男性^{おじや}が頷く。

「始祖様は仰^{おほ}っていたそうです。ハスト村が忽然^{こつぜん}と姿を消し、その消息が一切わからない。ただ、ハスト村は十年に一度、村ごと引越^ひし、一定の周期で元いた場所に戻ってくる。世話になった彼らのために、彼らが帰る場所を守らなければいけないと。それが大賢者の弟子である自分の役目である」

「大賢者の弟子!?」

男性の話を聞いていたヒルデガルドちゃんが驚き、声を上げた。

「どうということ!? 大賢者についてなにか知っているの？」

「大賢者とはこの世界を管理する存在であり、失われた大地の民の生き残りと言われていますが、詳しいことは私にもわかりません。そして、大賢者の弟子とは、その大賢者に認められた者であり、大賢者と会ったことのある者だそうです」

ヒルデガルドちゃんは、不満そうに男性を見る。

「なんで、今まで黙っていたの？ 私は千年以上前からこの里に訪れてるけど、そんなこと一度も話してくれなかったじゃない」

「ユーリシア様とリーゼ様が過去に旅立たれることが、このことを話す条件だったのでございます。

それまで、私もは話すことができなかったのです」

「つまり、あなたたちはあの二人が肉体ごと過去に飛ばされることを知っていたって言うの!」

怒りを露わに、ヒルデガルドちゃんが男を怒鳴りつけた。

僕はそんな彼女を宥める。

「ヒルデガルドちゃん、落ち着いて。『話さなかった』じゃなくて、『話すことができなかった』って言ったんだよ。ヒルデガルドちゃんなら、その違い、わかるよね」

「……わかってるわ。でも」

「それに、秘密って打ち明けてもらえない方も辛いけど、打ち明けることができないのも辛いと思うんだ。僕だって、ヒルデガルドちゃんやみんなには言っていない秘密があるし……」

「クルトに秘密? ああ……確かにいろいろとありそうね」

一瞬驚いた様子を見せるヒルデガルドちゃんだが、すぐに納得したように頷く。

「え!? 僕ってそんなに秘密があるように見えてるの!」

「クルトが秘密にしているっていうか、クルトの秘密っていうか」

なぜかヒルデガルドちゃんは明後日の方を向いて呟いた。

どういふことか気になるけど、僕の中でそれ以上考えない方がいいという意識が働く。

「探しましたわよ、クル。何をのんきにデートしているのですか」

そんな時、僕がかつてお世話になっていたパーティ「炎の竜牙」の一員だったマーレフィスさん



が、そう怒りながら近付いてきた。

デートではないけど、しかしのんきにしていたのは確かだったと反省する。

「ごめんなさい。なにかあったんですか？」

「ええ。これから防衛に関する作戦会議を行うのです。クルとその彼女は、本来は過去に精神を飛ばすために会議には不参加の予定でしたが、過去に行けなかったのなら連れてくるようにとミミコ様からの命令ですわ」

「ミミコさんから？ わかりました、すぐに行きます。あ、でもアクリが」

「クルト、アクリならあのドリアードの分体と一緒になんでしょ？ なら心配ないわ」

確かに、ヒルデガルドちゃんの言う通りか。むしろ僕とふたりきりでいるより安心だ。

それに、アクリが起きていたとしても会議の場には連れて行くことができない。

「わかりました。では、行きましょう」

僕は頷き、マールフェイスさんについていった。

「それで、クルトちゃんはいったいなにをしているの？」

「え？ お茶くみですけど」

僕はミミコさんにそう答えて、紅茶をカップに注ぎ、円卓を囲んで座っている皆さんの前に並べていく。

会議に僕が呼ばれたのは、お茶くみが必要だったからだと思って、真っ先に厨房ちゅうぼうに向かったんだけど……違ったのかな？

「クルトちゃん、お茶を配り終わったら空いてる席に座って」

ミミコさんがそう言って、椅子いすに座るように僕を促す。

そう言われても……と、僕はここにいる会議の参加者を見渡した。

まず目に入ったのはミミコさん。第三席宮廷魔術師である彼女が、ホームロス王国の中で一番立場が上の人間であり、僕たち使節団の代表でもある。

そして、その隣に座っているのが、アルレイド様。ヴァルハで騎士隊を纏まとめる隊長。隣には現在リクルトの守備隊を纏まとめているジェネリク様が座っている。この二人が騎士隊の代表だ。

そして、その横には工房主アトリエマスターオフィリア様もいる。

本当なら、僕たちの主人である工房主アトリエマスターリクト様もこの場にいないといけないんだけど、別の大切な役目があるからという理由でここにはいない。

剣聖の里からは、族長のルゴルさんと、その息子で族長補佐のゴランドスさんがいる。ゴランドスさんは僕より少し年上で、僕を除いたらこの場で一番若い、赤髪の男性だ。

そして最後に、ヒルデガルドちゃん。

一緒にこの里にやってきた、同じ工房に所属しているパーティ『サクラ』のみんなや、他の騎士様、マールフェイスさんもここにはいない。

そんな場所に僕が座ってもいいのだろうか？

そう思ったが、ルゴルさんが促してきた。

「どうぞクルト様。あなたはハスト村の代表なのですから」

「……わかりました」

僕は頷き、空いている席——ゴランドスさんとヒルデガルドちゃんの間に座った。

「じゃあ、せっかくだしクルトちゃんが淹^いれてくれた紅茶をいただきましょうか」

「悠長^{ゆうちやう}なことを言っている場合ですか、ミミコ様！」

アルレイド様が立ち上がり、声を荒らげる。

「悠長でいいですよ。まだこの里が攻められるまで三週間もあるんだし」

「たった三週間です！」

「落ち着いてください、隊長。クルトやヒルデガルド様に事情の説明もしてないんですから。ミミコ様の仰る通り、紅茶を飲みながら説明しましょう」

ジェネリク様はいつものように砕けた口調でアルレイド様を窘^{たしな}めるけど、しかしどこか緊張感を漂^はわせている。どうやら、僕がいない間、会議は一触即発の雰囲気だったらしい。

アルレイド様はジェネリク様を睨^{にら}みつけながらも黙^{もく}って座り、紅茶を一気に半分近く啣^{あお}った。

やっぱり熱かったのだろうか？ 一度目を見開いた——かと思うと、今度はゆっくりと飲んでくれた。

他のみんなも紅茶を飲んで最初は驚いた表情を浮かべたが、その後はゆっくりと味わっている。

ミミコさんが微笑^{ほほえ}みながら僕に向かって言う。

「美味しいわ、クルトちゃん。それに心が落ち着く」

「はい。リラックス効果のある茶葉を選びました。皆さん、会議で疲れていると思ひまして」

それにしても、さすがミミコさんだな。

さっきまでの殺伐^{さうばつ}とした雰囲気が一気に消えた。

あの場でミミコさんが紅茶を勧めていなかったら、冷静に話し合いなんてできなかっただろう。

「それで、何を揉^もめていたの？」

ヒルデガルドちゃんが尋ねると、アルレイド様が答える。

「防衛についてだ。人数にも差がある以上、籠城^{ろうじやうせん}戦ではなく、こちらの谷に戦力を集中させたいと思っている」

「反対です。我々の役目はこの地を守ることにあります。敵がどこからやってくるかわからない以上、この地を疎^{おろそ}かにすることはできません」

ルゴルさんは籠城戦を望んでいるのか。

「籠城戦は、友軍の到着が望める場合に行うべき戦法です。孤軍で行う場合は不利になります」
しかしアルレイド様は静かにそう言って首を横に振っていた。

この戦争で、剣聖の里の友軍と言えるのは、ヒルデガルドちゃんの部下たちだ。

ただ、魔神王の軍勢は剣聖の里への侵攻と同時に、この剣聖の里の西、ヒルデガルドちゃんが統治しているラプセラドという城塞都市にも侵攻を行っているらしい。

そちらの防備を怠れば、ヒルデガルドちゃんの領地が危機的状況に陥るだけでなく、剣聖の里も北と西、双方から攻め込まれることになってしまう。そのため、僕の知り合いでもあるソルフレアさんが率いる隊をはじめ、多くの部隊を配置しており、剣聖の里に回せる部隊には限りがある。

魔族が支配する魔領には四大派閥というものがあって、老帝ことヒルデガルドちゃん、今回侵攻してきた魔神王、そして獣王と魔竜皇という四人がトップに立っている。しかし獣王と魔竜皇は協定により援軍を出せないため、ヒルデガルドちゃんの部下以外の援軍は期待できないそうだ。

さらに、アルレイド様は続ける。

「そもそも、この里の壁は籠城戦には向いてない！」

この里の周囲にあるのは、目には見えない壁。

なんで透明なのか理由はわからないけれど、僕が子どもの頃からすであったものだ。

壁の内側の様子が丸見えというのは、相手の虚をつくことはできても、それ以上に人員やバリスタなどの兵器の配置が丸見えで戦いにくいらしい。

「敵の中には空を飛ぶ魔物を従えている魔族もいるかもしれない。その場合、果たして谷での迎撃が有効かどうか？ それに、敵の真の狙いがまだわからないのだろう？」

オフィリア様が目を細めて言った。

「オフィリアちゃんの言う通り。魔神王の狙いがホムーロス王国かどうかもわからないだし」

「どういうことですか？ 魔神王の目的は転移石の奪取、その後にホムーロス王国を強襲する計画なのでしょう？」

アルレイド様が尋ねた。

魔神王の配下はタイコーン辺境伯と接触し、魔領に近い西側の守りの弱体化を図っていたらしい。「ええ。そのために私の身柄があゝの辺境伯に引き渡されたんだもの」

そうそう、その配下の人がヒルデガルドちゃんを捕まえて、タイコーン辺境伯に引き渡してたんだよね。

本当に、タイコーン辺境伯の小さい女の子好きには困ったものだと思う。主君である辺境伯のことを悪く言うつもりはないけれど、まさか成長しないヒルデガルドちゃんを自分のものにするために、ホムーロス王国を危険に晒すなんて。

今は娘であるファミルさんのお陰で、ちゃんと子供の成長を見守れるようになったけれど。

少し話が逸れてしまったけど、魔神王がこれまでホムーロス王国を手に入れるために陰で画策していたのなら、今回もその計画の一環だと考えるべきだろう。

「普通の転移石だというのなら、私も納得した。だが、あの転移石はそうではないだろうか？」

オフィリア様がそう言って僕を見た。

僕のような代理ではない、本物の工房主であるオフィリア様なら全部自分で説明できるはずな

のだろうけれど……ここまで発言の少ない僕を氣遣って、そう尋ねてくれたと理解できた。

「はい。あの転移石は通常の転移石ではありません。まず、通常の転移石は、地面の下を巡る魔素の流れとその力を使って転移していますが――」

「待て、待てくれ。クルト、お前は転移石の仕組みについて理解しているのか？」

「え？ はい」

「クルトちゃん。転移石の仕組みについては、工房主ヴィトウキントですら完全には理解していません。彼が作っていたのはあくまで複製だったから」

オフィリア様とミミコさんがそう言うけど、転移石の仕組みってそんな難しいものなのか？

もしかして、転移石の仕組みについて詳しい僕って……

「ミミコ、それ以上は」

「あ……うん。まあ、工房主ヴィトウキントが転移石に関する技術を独占していたせいで、他の人間が研究しなかっただけかな」

ヒルデガルドちゃんに耳打ちされたミミコさんがそう訂正した。

ああ、なるほど、これまでは転移石について誰も調べようとしなかったのか。

てっきり、僕が凄いだなんて勘違いするところだった。

「では、説明を続けますが、この剣聖の里にある転移石は、以前ミミコさんに話した通り、上位空間に転移するための転移石です。その仕組みは、魔素の流れに乗るのではなく、転移石そのものが

魔素を吸収して自ら魔素の流れを作り出しています」

「他の転移石とできることが違うのか？」

「そうですね。亜空間への転移の他、やろうと思えば転移石のない場所への転移も可能です」

僕の説明に、オフィリア様が目を丸くする。

「転移石のない場所への転移だっ!? つまり、使おうと思えば、玉座の間に軍隊を送り込むことも可能だということかっ!？」

「はい。ただ、理論上は可能というだけです。魔素の流れを完全に計測しなければ、地中に転移したり、上空何千メートルの場所に転移したりしてしまいますから。目印かなにかがあれば話は別ですが」

「目印というのは、他の転移石ということか!？」

アルレイド様が声を上げて尋ねた。

「いえ、ヴィトウキントさんの作った転移石は、そもそも地脈の魔素の濃い場所に作っているので、魔素の流れが新しく割り込むのが非常に難しいんです」

「そうか……それはよかった。もしもそれが可能だったら、王都に魔族が流れ込むところだったかな」

「そうですね。一年以内に王都で悪魔の召喚とかしていなかったら問題ありませんよ」

僕は笑って言うと、なぜかミミコさんとオフィリア様が固まる。

「クルトちゃん……悪魔の召喚をしている場所になら転移ができるの？」

「え？ はい。可能ですね。悪魔って元々魔素が強いですからね。その悪魔をこの次元に引き込む際、魔素の強い流れができるんです。その流れが消えるまでに、だいたい一年くらい時間がかかりますから、一年以内に悪魔を召喚した場所になら、少し調整すれば転移できます」

上級悪魔とかくらいなら、その辺を調べたら結構出てくる。しかもすぐに死んじやうから、わざわざ召喚しようなんて人はいないと思う。

最近は数が減ったと思ったけれど、それでも見かけたし。

「(悪魔が召喚された場所といえ、ラピタル文明の遺跡とタイコーン辺境伯の屋敷の地下、そして――)」

「(王都の大聖堂もだね。あそこにも、悪魔を召喚した痕跡^{こんせき}があったの。教会に出入りしてるガストル侯爵の姪^{めい}が悪魔と契約して、代償^{たいしょう}として命を落としている)」

「(トリスタン司教も厄介な置き土産を残してくれたものだな)」

ミミコさんとオフィリア様がこそそと話を始めた。

会議の場で密談するのは普通、周囲に咎^{とが}められるものだと思っただけだけれど、他の人は注意をする様子もない。

それどころか、他の人も何か僕に聞こえないようにこそそと話をしているようだ。

そのこそそ話が終わったと思うと、ミミコさんが立ち上がってアルレイド様に言った。

「アルレイド將軍。第三席宮廷魔術師である私が、陛下の名において命じます。転移石の死守は必須です。絶対に奪われてはいけません」

「最悪、魔族に転移されてもいいように遺跡の周辺にも部隊を配置する予定でしたが」

「その案は継続してください。先ほども言った通り、魔神王の狙いがわからないですから」

ミミコさんが凛^{りん}とした態度でアルレイド様に命令を出した。

普段のふざけた態度は微塵^{みじん}もない。

その光景に、僕は感動するよりもむしろ緊張した。それだけ事態は緊迫^{きんぱく}しているということだ。

さっき、ミミコさんは三週間以上あると言ったけれど、やっぱりアルレイド様の言った通り三週間しかないと言ったほうがいい。

「しかし、この里の周囲には小高い丘や山も多く、籠城となると、敵に谷を越えられた後の動きが把握しにくくなってしまいます。各地に偵察用の部隊を配置するにも、こちらの人数は少数ですから」

確かにこの里からだ、城壁に上がったとしても見える場所には限度がある。

一番高い場所、高さ二十メートルくらいだったかな？

「なら、空の上から偵察^{ていさつ}するのはどうですか？」

「空の上から？」

僕の言葉にアルレイド様が首を傾げていると、ミミコさんが何かを思い出したように言った。

「そういえばユーリシアちゃんから聞いたけど、クルトちゃんにはドラゴンの友達がいるのよね？
そっか、そのドラゴンの背に乗れば——」

ドラゴンの友達？

この前、ソルフレアさんに命を狙われていたドラゴンのことかな？

そう思い至って否定しようと口を開きかけるが……

「ダメよ。この世界の多くのドラゴンは魔竜皇の配下。配下ではなかったとしても、魔竜皇の眷属であることには違いないの。魔竜皇が中立の立場をとると決めた以上、クルトの友達であったとしても、今回の戦争でドラゴンは使えないわ」

ヒルデガルドちゃんが目を細めて言った。

でも——

「ドラゴンじゃなくても、気球を浮かべるとか、方法はいろいろありますよね？」

「キキュー？ 悪いんだけど、クルトちゃん。キキューってなんなのか教えてくれない？」

尋ねられた僕は、気球の簡単な仕組みを教えた。

魔法晶石によって熱することで空気を軽くし、その空気を大きな布で集めて浮かび上がるというものだ。

それを聞いたミミコさんとオフィリア様が、なぜか目を丸くしてこそ話を始めた。

「(どう思うっ)」

「(どう思うも何も、こんな単純な原理で、人類が成しえないとされた飛行が本当に可能なのか？)」

「(原理としてはわかりやすいし、クルトちゃんができるって言うなら本当にできると思うけど)」

「(ああ、そこだけは私も信用している……まったく、クルトが来る前に他の皆に宣言しておいてよかった。『クルトの話の後、私たちがこそそと話をしても気にしないように』とな……)」

ミミコさんと話した後、なぜかオフィリア様が頭を押さえた。

もしかして、僕がいかに素人丸出しという考えをしたから、会議に呼んだことを後悔しているのかな？

ミミコさんたちだけじゃなくて、他のみんなも隣の席の人と囁き合っている。

「あの……すみません。こんな変なことを言ってしまった」

「いいえ、クルト様。気球は確かに必要なようですね」

ルゴルさんが言った。

でも、一つだけ懸念点もある。

「あ……通信機も必要ですよね」

「つーしんき？」

「遠くの人と話すための道具です」

「それって簡単に作れるものなの？」

「はい。簡単です。そうですね、中継用の基地を作らない場合だと、十キロ以内でしたら通話でき

ます」

まあ、通信機くらい、ミミコさんのような凄腕の魔術師なら簡単に用意できる……ううん、もしかしたら魔道具なんてなくても通話できるのかもしれない。だって、通信機って言葉にピンときていないようだったから。

「(……オフィリアちゃん、何か言うことはある?)」

「(……いや。遠くの者に声を届ける手法はリクルトの町でも見せてもらった。しかし、中継用の基地がなければ十キロと言っていたな?)」

「(クルトちゃんの話からすると、その中継用の基地を作れば、もつと遠くの人とも会話ができるみたいね……。私の大好きな伝書鳩でんしやうとの時代は終わりかな)」

やっぱり僕の言っていることがおかしいのか、ミミコさんがため息をついている。

「クルトちゃん、通信機一個作るのに必要な時間はどのくらい?」

「材料があれば。チャネル数によって変わりますが、量産しても一日はかかりません」

「ちゃんねる……? まあ、材料はこつちで用意するから、今から、必要なものを書き出してくれる? あと、今回の戦いで必要そうなものもあつたら、使い方とその素材について書いておいてくれないかな? あつちの部屋で。ミスリルとかそういう素材が出てきたらクルトちゃんに頼むことになるそうだけど」

「そうですね。ミスリルって売ってるのを見たことがないですよ。どこでも採れる素材だから

当然ですけど」

「ウン、ソウダネ」

ミミコさんが明後日あさっての方を見て頷いた。

なにかあつちの方に虫でもいたのかな?

そんなことを思いつつ、僕は今回の戦いで使えそうな雑貨をリストアップするために、隣の部屋に向かった。



私——ミミコはクルトちゃんが隣の部屋の扉を閉めたと同時に、もう一度ため息をついた。

私だけではない、ここにいる者全員がため息をつく。

「さっき話をしていて改めて気付いたけど、相変わらずあのバカクルトは無自覚なのね。まあ、ここで下手に自覚して二十四時間ぶつ倒れられたら面倒だから、無自覚のままの方がいいんだけど」
老帝ヒルデガルドがため息をつく。

クルトちゃんは、自分の能力について自覚すると、その場で丸一日昏睡こんすい状態に陥り、目覚めてからはその原因となる記憶を失う。

そのことは事前に説明しており、この場にいる全員が共通認識である。

「しかし、あのクルトがここまで無茶な奴だとはな」

ジェネリク副将軍が苦笑して言った。

彼はクルトとたまに会話するらしいが、彼の異常性については一部しか把握していなかった。

逆にクルトとは普段接しないアルレイド将軍の方が、クルトについて詳しい。

ここにいる人間の中で、ヒルデガルドを除き、最初にクルトと出会ったのが彼である。

「とにかく、籠城の時の敵軍の動きが読めないという点については、クルトちゃんのナイスアイデアでカバーできたわけだけど……三十万の敵すべてに取り囲まれたらさすがに辛いわね。どこかに伏兵の配置は必須かな？ 谷でも攻撃は仕掛けたいところだけど」

私は地図を見て、アルレイド将軍と兵の配置について相談をする。

「籠城と決まった以上、周囲の壁を有効に使わせてもらおう。正直、クルト君の村の人が作った壁というだけでかなり心強い。ただ、壁の色が透明というのはなんとも……クルト君に壁の色を元に戻せるか尋ねないとな」

アルレイド将軍はそう言って紅茶を飲んだ。

さつきまで籠城なんてありえないと断言していた彼だったが、この紅茶のお陰で、籠城についての意見を冷静に出すことができたようだ。

できれば王国の元老院の議会でもこの紅茶を出してほしい。

クルトちゃんに出張で来てもらいたい気分だ。

「さつき、大賢者について里の人から聞いたんだけど……ルゴル、あなたから私に話せることは増えているの？」

ヒルデガルドがそう尋ねた。

大賢者について？

どうやら、クルトちゃんが彼女と散歩している間に、何か話の進展があったらしい。

「我々が今話せることは限られています。我々は大賢者の命令に従い、いつか帰ってくるハスト村の住民に返すためにこの地を守護している一族であるということくらいです。あとはそうですね……過去に旅立たれた二人——ユーリシア殿とリーゼロッテ殿が、この世界についての真実を知っていることでしょう」

ルゴルは天井を見上げて、そう言った。



私、ユーリシアは、リーゼと一緒に、農家のおじさんの案内で村を歩いていた。

気が付けば見知らぬ土地に、リーゼと二人きりで立っていた私たちは、彼に声をかけられて、村を案内してもらっている最中なのだ。

村はとても長閑^{のどか}だった。

風が吹けばツワブギの冠毛^{かんもう}が飛んでいき、せせらぎでは手の長い海老^{えび}が魚が通りかかるのをいまかいまと待ち構えている。

養豚場だろう、木の柵^{さく}の中では何かを探しているのか豚が土をひたすら掘っていて、その横の餌^{えさ}入れには、盗み食いしようと猫とドラゴンが集まっていた。

村には子供もいるようで、人形遊びしている。あれは……ゴブリンと剣士の土人形だろうか？色付きの等身サイズで、関節まで動いているみたいだ。

通りかかった家の前では、一組の夫婦とその子供の三人が並んでいた。彼らの前には画家らしき男がいる。どうやら家族の思い出を一枚の絵として残しているらしい。

「笑って笑って、さあ描くよ、はいピース！」

画家がそう言うと同時に、わずか数秒で一枚の絵画——まるで現実を切り取ったかのような写真画が描かれ、その完成した絵を夫婦に渡していた。

「いやあ、なにもない村でつまらないだろう？」

「そんなことはありません」

農家のおじさんが謙遜^{けんそん}するふうでもなく、本心のように言ってきたので、私とリーゼは同時に首を横に振った。

「ははは、お世辞^{せじ}でもそう言ってもらえると嬉しいよ」

「お世辞ではありませんから」

「またも声を揃^{そろ}えてしまう。

さつきから汗が止まらない。

私もリーゼもこれまで散々クルトのことを見てきて、もう何が起きても驚かないつもりでいた。しかし、しかしだ。

「あの、空を飛んでるあれはなんですか？」

リーゼが空に浮かぶボールのようなものを指さして尋ねた。

「あれはゴブリン監視用の上空感知装置だよ。一応、村には透明の壁を設置して外部からの侵入者を防ぐようにしてはいるんだが、それでもゴブリンは怖いからな」

「透明の壁？」

「ああ、前はオリハルコンの壁で村を覆^{おほ}っていたんだけど、『家が陰になる！ワシは魔道具ではなく太陽の光で洗濯物を乾かしたいんじや』って爺様^{じさま}から苦情が来てな。それで太陽の光を反射させて陰にならないようにしたら、今度は『時間問わずに日が入り込む！夕方、居間に太陽が差し込むのは困る！家を反転させるのに一体何時間かかると思ってるんじや！いい加減にしろ！』って怒られて、結局爺様が勝手に透明な建材で壁を作り替えたんだよ。困ったもんだろ？」

「そんなご近所トラブルみたいに語られなくても」

農家のおじさんが、「ははは」と笑っているが、もうどこに驚けばいいのかわからない。

「パルクおじさん。こんにちば。そちらの方々は？」

そう言つて声をかけてきたのは、二十歳くらいの黒髪の男性だった。

「村の外の人だよ。どうやら道に迷つたみたいだね。行商人が来るまでうちでお茶でも飲んでいてもらおうかと思つたんだ」

「え？ バルクおじさんの家？ 若い女性を男の一人暮らしの家に連れていくのはどうかと思うよ？ ……君たち、僕の家に来ないかい？ 妻もいるから安心だと思ふよ」

「ああ……悪い、そこまで気が回らなかつたな。嬢ちゃん、この坊主ぼんずの家で待つてるか？ 行商人が来たら俺から報しせるよ」

私とリーゼは視線を交わし、その言葉に甘えさせてもらうことにした。

「お願いします」

「よかつた。妻も話し相手が欲しかつたと思うからちよいどいいよ」

男は朗らかな笑みを浮かべて頷いた。

「そうだ、僕はニコラス。君たちの名前は？」

「……リーゼロツテと申します」

リーゼは少し逡巡ぶんじゆんしてから、家名は伏せて、本名を名乗つた。

世話になる相手に対し、偽名を使うのは不義理だと思つたのだろう。

「ユーリシアです」

「そうか……うーん、二人ともいい名前だね。うん、女の子の名前は華がある」

ニコラスは名前を聞いて、一瞬考ふる素振そぶりを見せた。

私たちの名前に何か違和感があつたのだろうか？

「うちの家はもうすぐそこだよ」

そう言つて彼が指さした場所は、レンガ造りの一軒家だった。

まるで絵本に出てくるような可愛らしい家で、庭にはパナモモの木が植えられていて、黄色い果樹が実つていた。

「ただいま、ソフィ！ お客さんを連れてきたよ！」

ニコラスは中にいる妻——ソフィという名前らしい——に声をかけながら家の中に入った。すると、ゆったりとしたサイズの服を着た、灰色の髪の小顔の女性が玄関に迎えに来た。

ニコラスといい、このソフィといい、なんだか妙な感じがする。

悪い人じゃなさそうだけど、何かムズムズするな。

「あらあら、いらつしゃい。狭い家だけど上がつて」

「お世話になります」

「お邪魔します」

リーゼと私はそう言つて、家にかかる。

家の中はビックリドッキリギミックが溢あふれている——なんてことはなく、普通の家だった。

ソフィが隣の部屋から椅子を持ってこようとしたところで、ニコラスが「僕がするからソフィは

クッキーの用意をお願い」と言った。

ソフィは笑顔で頷き、小麦粉を取り出す。

これが普通の人間だったら、「え？　小麦粉？　クッキーってそこから？」と驚くだろうが、そこはクルトに訓練された私とリーゼだ。

驚くことなく、三分で焼きあがったクッキーを受け入れる。

調理工程は、やはり見ていてもわからない。

「ごめんなさい、事前にわかっていたら手の込んだお菓子も作れたんだけど。どうぞお召し上がりください」

ニコラスが用意した椅子に座り、私たちは紅茶に角砂糖を二つずつ入れる。
きつと、甘いのが好きなんだと思われるだろう。

「それでは遠慮なく」

「いただきます」

私とリーゼはそれぞれ形の違うクッキーを手にし、口に運んだ。

ああ、うまい。

柑橘系の果物が使われているのか、疲れた身体には酸味が、この短期間で見せつけられた非常識な光景によって消耗^{しょうもう}しきつた脳細胞には、糖分が染み渡る。

やはり、理不尽極まりない現象と遭遇^{そうぐう}した時は甘い食べ物が一番だ。

と、そうだった。

「あの、聞きたいんですけど、ここはハスト村で合っていますか？」

「ええ、そうよ。なにもない静かな村でしょ？」

ソフィは笑顔で頷いた。

なにもないという点だけは同意しかねるけど、とりあえず頷いておく。

「このあたりの地図がありますか？」

「ああ、そうだったわね。地図は——」

「ソフィ、僕が取ってくるよ」

ソフィが立ち上がろうとすると、ニコラスが笑顔で止めて二階に上がった。

そんなニコラスを見て、ソフィは苦笑する。

すぐにニコラスが戻ってきて、周辺の地図を見せてくれた。

さすがに周辺国まで描いている地図はないようだ。

「どう思います？」

それを見て、リーゼが小声で私に意見を求めてきた。

「私たちは剣聖の里には転移で行ったから、周辺の地理には詳しくないが……南に大砂漠、東に大森林——ということとは魔領だと思う」

「やはりそうですね。少なくとも、クルト様がハスト村があると言っていたシーン山脈ではあり

「ませんわよね」

「ああ。もしかしたら、過去じゃなくて、現代のハスト村に転移したのかとも思ったが……そうではないらしいな」

ひそひそと話す私たちに、ソフィが心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫？」

「え……ええ、大丈夫です。ちょっと思ったより遠くに来ていたようで」

私はそう言って苦笑し、紅茶を飲んだ。

ヒルデガルドの話では、時間が経てば元の時代に戻るそうだから、予定通りの仕事はしておくか。

私たちが調べるのは三つ。

シーン山脈にあったハスト村がなぜ消滅したのか？

大賢者とは何者なのか？

そして、時の大精霊——アクリはどうして生まれたのか？

もつとも、「あなたの村はこれから消滅するみたいですが、なぜですか？」なんて馬鹿みたいな質問はできないし……さて、なんと質問したらいいものか。

「あの、聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

私が言いあぐねていると、リーゼが口を開いた。

腐っても、さすがは第三王女だ。

政治の話することも多いだろうし、私なんかより、リーゼの方が的確な質問を——

「この村に、クルトという男の子はいらっしゃいますか？」

「なにバカな質問をしてるんだっ！」

私は思わずリーゼの頭を引っぱっていた。

リーゼは恨みがましくこちらを見ると、小声で抗議してくる。

「なにをしますの、ユーリさん！」

「なにをするは私のセリフだ！」

「だって、ここが過去のハスト村ということは、子供のクルト様がいるかもしれないではありませんか。十五歳であの可愛さですよ。幼き日のクルト様は絶対にかわいいに決まっています」

「それは否定しないが、聞き方ってもんがあるだろ！」

確かに、確かに私も気になる。

子供のクルトなんて、絶対に天使のような子供に決まっている。

見たい、見てみたい。

だが——

「クルト？ いや、そんな男の子はこの村にはいないな」

ニコラスの返事は、そんな残念なものだった。

クルトがいない……ということは、ここはクルトが生まれるより前の時代なのか。

「もしかして、その子を探して旅をしているの？」

「ああ、いえ、クルトっていうのは私の国に伝わる英雄の名前で、そのモデルとなった人がこのあたりに住んでいるという噂^{うわさ}を聞いたような聞かなかったような、そんな感じなんです」

「そうなの？　でもそんな凄い人がいたら、ぜひお目にかかりたいわね」

ソフィは笑顔で頷いた。

ふう、なんとか誤魔化せたな。

そうだ、この話の流れで――

「この村に、そういう伝説とかいろんなことを知っている人はいませんか？　賢者とか呼ばれていそうな人とか」

私はそう言って、大賢者について聞くことにした。

「賢者か。といっても、ここは何もない村だからな。面白い研究をしている人ならいるけれど」

「面白い研究？　どんな研究ですの？」

「この世界そのものについての研究だよ――そうだな、これを飲み終わったら案内するよ」

ニコラスはすっかり温^ぬくなった紅茶に角砂糖を一つ入れながら、笑ってそう言った。

なるほど、世界そのものの研究か。

私は一度、大賢者と顔を合わせたことがあるのだが、自らを大賢者と名乗る彼女らしいな。

「そういえば、その人はどんな女性なんですか？」

紅茶を飲み終え、案内してもらっている途中、私はそう尋ねてみる。

「え？　男だよ、あの子は」

しかしニコラスの答えは、予想外のものだった。

それはつまり、私が顔を合わせた彼女に会えるわけではない、ということだ。

内心ガツカリするが、ここで引き返すわけにはいかない。

なぜなら、私はまだ、大賢者と会っていない――ということになっているからだ。

少なくとも、リーゼにはまだ話したくない。

私が大賢者と会って、彼女と話した内容を。

「はあ……」

私は大賢者との会話を思い出し、ため息をついた。

「どうしました、ユーリさん。緊張しているんですか？」

リーゼが私のため息を曲解して捉え、小声で尋ねてきた。

「……ああ、そんなところだ」

「仕方ありませんわ。大賢者といえば、私のお母様とユーリさんのおばあ様にも関係があるようですから。普通に考えればこの時代に生きているとは思えにくいですが、大賢者が人間とは限りませ

んし、先祖代々記憶を引き継いできたという工房主ヴィトウキントの例もごいますから、一概に否定はできませんわ」

「そうだな」

私は頷きながら考えた。

大賢者は私に言った。

私、ユーリシアは千二百年以上も前から大賢者の弟子なのだ、と。

私はそれを聞かされた時、運命論みたいなものだと思って一笑に付したが、こうして実際に過去にやってきてみると、私が今から大賢者の弟子になる可能性が高いと一瞬思ったのだ……まあ、その予想は外れたわけだけど。

そうだ、この世界について研究しているというのなら、相手が大賢者ではないとしても、私たちの知らない別の何かについて知っているのかもしれない。

歩くことしばし、私たちは村のはずれの、建物らしきものもない場所まで来た。

「その研究者の家は遠いんでしょうか？」

リーゼが少し不安そうに尋ねる。

ニコラスは悪人には見えないが、しかしハスト村の住人だ。

常識知らずだから、もしかしたらここから歩いて十時間——とか言われても困るよな。

「いや、もうここだよ」

ここ？

しかし、目の前には大きな岩があるほかは何も見えない。

「この岩があいつの研究所の入り口さ。ほら、ここに三つの突起があるだろ？ これを順番に押すと——」

ニコラスが三つの突起を合計七回押すと、岩の側面に切れ目が入り、扉のように開いた。

「と、このように開くんだよ。驚いた？」

私たちは同時に頷いた。

「うん、そうだよ。田舎じゃ全員見知った仲だから、建物に入る番号を全員知ってるんだ」

ニコラスは笑って言った。

驚いたってそっち？ この鍵^{かぎ}の仕組みじゃなくて？

まるで、「うちは田舎だから、村人全員、鍵^{かぎ}をかける習慣がないんだ」みたいな言い方だった。

本当にクルトと同じノリだ。

「あの、ニコラスさん。少し気になるんですけど、村の人の中で、急に意識を失う人とかいませんか？ 丸一日寝込んで、でも翌日には何事もなかったかのように目を覚まして、なぜか意識を失ったその日の記憶がない……みたいな」

私が尋ねると、ニコラスは笑顔で頷く。

「知ってるの？ このあたりの風土病？ って言うのかな。多い時だと年に、二、三回起こるよ。」

僕たちにも原因がわからなくてね」

なるほど、クルトが自分の能力について自覚したら意識を失うのは、あいつだけの特異体質かとも思っていたけれど、やっぱり村人全員が同じなのか。

まあ、ニコラスたちの様子を見るとそうだな。

「もしかして、ユーリシアさんはその原因に何か心当たりがあるのかい？」

「いえ、このあたりでたまに発症する病気としか。治療法があれば知りたいと思ひまして」

私はそう言葉を濁す。

「そっか……残念だ。残念だけど治療法は僕たちにもわからないんだ。どんな薬も効かなくてね」

彼はそう言って、岩戸の中に入っていく。

中は階段になっていて地下に続いていた。

少し薄暗いが、地獄の底に続いているような恐怖はなく、まるで未知の世界に続いているような不思議な感覚に陥った。

足取りが軽い。

いや、足取りだけじゃなく、胸も軽くなったような……ん？

「なんで胸が軽くなるんだ？」

私は下を見る。胸がしぼんでしまったわけではない。

「確かに私も胸が軽くなった気がしますわ。これはいい」

リーゼの胸が軽いのは元からだろうとか、そういうことを言っている場合ではなさそうだ。

胸だけではなく、体全体が軽くなっている。

「ああ、このあたりはGが小さくなってる——というより、反重力が働いているからね。もう少ししたら完全な無重力状態になるから、手すりを持っていてね」

「無重力？」

「わかりやすく言うと、水中にいるのと同じ状態って感じかな？ 厳密にはちよつと違うし、呼吸もできるけど、感覚として一番近いのはそれだと思う。重い荷物を運ぶ時とか便利に思えるけど、定期的に魔法晶石に魔力を補給しないといけないから、やっぱり不便だよ」

いやいやいやいやいや、不便とか便利とかそういう次元じゃないから。

無重力という言葉の意味はよくわからないけれど、これってつまり、空を飛ぶことができる魔道具ってことだろ？

空を飛ぶ魔道具については、これまで多くの研究者、工房主が作成を試みては失敗し続けてきた。それを千二百年も前に既に完成させていたというのか。

もっと詳しく聞きたくてニコラスを見ると、彼は何かを察したような表情になった。

「ごめん、気付かなかったよ。スカートをはいている女性に無重力の場所は辛いよね」

察するところが全然違う！

ただ、そういう気遣いができるころは、少しクルトに似ている気がする。

「ちょっと待って」

ニコラスはそう言うのと、持っていた鞆かばんから裁縫セットと糸の束——というより塊かたまりを取り出した。なんで裁縫セット？　と思っていると、ニコラスは一瞬にしてスカートの下に穿くためのショーツ丈のレギンスを作った。手の動きがまるで見えなかった。

普通、服を作る時は糸から機織り機で布を織って、それを型紙に合わせて裁たって、縫ぬって作るものだ。糸から直接作るものではない。

「男の僕が作ったもので申し訳ないけど、これを穿いてよ。僕は後ろを向いてるから」

彼はそう言って私たちにレギンスを渡した。

糸から直接作ったためか、布の縫い目がどこにも見つからない。

当然、穿き心地は申し分がない。

見ただけでサイズを把握されるのは少し恥ずかしいが。

「ありがとうございます。あ……でも、対価として渡せるお金が……」

リーゼが申し訳なさそうに言った。

こちらは無一文というわけではないのだが、持っているのはこの時代から千二百年後の貨幣。この時代に使えとは思えない。

金貨なら錆潰いつぶせば……と思うかもしれないが、ハスト村はミスリル鉱石を屑石くずいしとして捨てているような村らしい。当然、金の価値も高くはないだろう。

「ははは、そんな急いそぎしらえのものにお金なんて貰もらえないよ。というより、この村ではあまりお金は使わないからね」

ニコラスは私たちに背を向けたまま笑って言った。

急いそぎしらえというけれど、百年穿いても擦り切れない品質は保証されていてもおかしくない。とはいえ、ここでお金を渡そうとして変に思われても困るし、ありがたく受け取っておこう。レギンスを穿き終えてから、さらに先に進むと、完全に体から重さという概念が失われた。

水の中なら上下の感覚は残っているが、今は上下の感覚どころか左右も含めて曖昧あいまいになっている。目を閉じて動いた結果、壁を歩いていたとしても不思議ではない。いや、もはや歩くという感覚が正しいかどうかすら微妙だ。

私たちは手すりを頼りに奥に向かう。

すると遠くから、輝くような明かりが見えてきた。

少なくとも蝟燭ろうそくやランプなどの微かな光ではない。

魔法晶石による照明とも違う気がする。

まるで太陽の光のような——でもこんな地下に？

まあ、ハスト村だし、太陽の光が差し込む地下空間があっても不思議ではないか。

そう思ったが、やっぱりというか、私の予想は簡単に裏切られることになった。

なぜなら、その先に広がる大きな部屋——そこに小さな太陽そのものがあつたのだから。